

た よ り



〒518-0814 伊賀市上友生785番地

TEL&FAX:0595(21)8839

URL:http://www.iga.ed.jp/igaken

E-mail:iga-ken@iga.ed.jp

3学期がスタートし3週間、明日から2月♪

3学期がスタートし、3週間が経ちました。各学校・園では新型コロナウイルスの感染拡大防止に引き続き取り組んでいることだと思えます。感染者数は県下的にみても少しずつ減少していますが、まだまだ予断を許さない状況です。また、この冬はインフルエンザの感染者数も増えており、基本的な感染防止対策「マスクの着用、咳エチケットや石けんによる手洗い、手指消毒用アルコール等による消毒など」を改めて継続・徹底していくしかありません。

今日で1月も終わり、いよいよ明日から2月です。

中学校においては入試が直前に迫り、子どもたちがベストを尽くせるように気を配られていることだと思えます。小学校・園においても卒業や進級に向けてとても大事な時です。教育活動が充実したものになりますよう願っています。



2023年の重点取組を考える♪

1月11日(水)に行われた校(園)長会議の冒頭で、教育長から年頭に当たってのあいさつがあり、その中で「タブレットをきっかけに組織的に授業改革をし、学力向上を目指す年にしていきたい。」「小中学校の学校給食の無償化を学校と家庭・地域の食育につなげていきたい。」というお話がありました。私自身は、その会議に参加していませんが、私なりに整理してみました。

(1) タブレットをきっかけに組織的に授業改革をし、学力向上を目指す

成和西小学校・緑ヶ丘中学校の研究発表会の公開授業や研究報告では、タブレットを1つのツールとして活用しながら、主体的・対話的で深い学びにつなげる授業づくりについて具体的実践を通して提起いただきました。タブレットの活用が目的ではなく、タブレットを「きっかけ」とし、授業改善を目指すという実践でした。

ある学級が、ある担任が実践すればいいというのではなく、「組織的に」、つまり、学校総体として課題や取組を共有しながら具体的に進めていくこと、そして、その取組が授業

「改善」でなく授業「改革」となること、最終的には「学力向上」に結び付くものであることが求められているということだと思います。全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果だけがすべてではありませんが、学習指導要領で子どもたちに付けるべきとされている力を数値的・客観的に把握・分析できるものとしてしっかりと活用していくことが大切です。タブレットを効果的に活用し、「授業改革」を全校体制で進めていきましょう。2校の取組を参考にしながら、各学校での実践を大事にしていきたいですね。

(2)小中学校の学校給食の無償化を学校と家庭・地域の食育につなげる

この取組は、大きな予算を伴いますが、非常に意義ある取組です。給食費が無償になったということで終わるのではなく、「無償化」＝「市の予算で支出」という意味も考えながら、充実した取組と成果が求められています。特に、学校だけでなく、家庭・地域の食育につなげるという目的が重要です。令和4年度の伊賀市教育方針には、学校での食育の推進や食に関する指導、地場産食材を通して地域や文化への理解を深めるという目標が明記されていますが、そこには、「家庭」という言葉は入っていませんでしたが、家庭での食育をどう推進していくか、学校での取組とどうリンクさせていくかが、2023年の大きな課題だと思います。「学校マニフェスト」や「学校経営方針」の中に具体的に位置付け、取組を進めていきたいですね。保護者への発信&共有も大事にしながら。

元気いっぱい！友生保育園の子どもたち♪

1月12日(木)、友生保育園の子どもたちが老人クラブの方と一緒に当センター運動場へ凧揚げに来られました。前日は大変風の強い日でしたが、この日はほとんど風がなく、穏やかな日となりました。園児の皆さんが走りながら凧を揚げようとするのを、老人クラブの方々がサポートしながら温かく見守る姿が印象的でした。また、羽子板も持参されており、板を上手に使いながら楽しんでいました。正月ならではの遊びを満喫し、にぎやかな声が運動場に響き渡りました。



また、午後からは、うさぎをモチーフに作った飾りを持って、新年の挨拶に来てくれました。すてきな飾りと元気いっぱいの挨拶にとてもうれしくなりました。センター事務室前に掲示していますので、ご覧ください。

雑感：1月16日(月)、研修講座「食物アレルギー」を実施しました。国立病院機構三重病院の長尾みずほさんから『学校生活におけるアレルギー疾患の管理』という演題でお話を伺いました。当センターの研修講座でこれまで何度も長尾さんにお世話になっています。今回の講座の内容については研修ニュースで共有いただければと思います。私が初めて長尾さんのお話を聞かせていただいたのは10年くらい前になります。東京都の事例を聞く中で、「早くエピペンを打てば助かったかもしれない」という言葉を今でも鮮明に覚えています。「大人が聞いても子どもは大丈夫と言う。状況を的確に把握し、適切な処置をいかに早く行うかが重要」と学びました。「迷ったら打つ」「疑いを持ったら速やかに打つ」ということも心に刻みました。食物アレルギーへの対応は、症状が出た時の対応も当然重要ですが、子どもの状況把握、除去食の内容(調理方法・盛り付け方・配食の方法等)、エピペンの保管・使用、危機管理マニュアル等について全教職員が共通理解し、即時に動ける体制づくりが必須です。すべての学校・園で行われていることと思いますが、常に危機意識をもって臨む覚悟が必要だと再認識しました。